

## 小説家の四季 二〇一七年 春

佐藤正午

ダンボールの空箱を二つ用意して、箱の底にティッシュを敷きつめる。二つの箱の側面には、まもなく同じ大きさの穴があけてあり、横にくつつけて並べるとその穴が重なり合い、右の箱から左の箱へ、また左の箱から右の箱へと、通り抜けが可能になる。ダンボールの続き部屋である。部屋の一つには屋根として蓋がかぶせてあるので中は暗い。もう一つのように屋根はない。そこへ飼いはじめたばかりの子犬を入れてやる。

すると子犬は二つの部屋を行き来するうち、屋根のあるほうを住処、寝床として認識するようになる。暗くて落ち着くからだ。あたりまえだ。しかも犬はもともときれいだから、人間の子供と違い自分の寝床は汚さない。ティッシュはおしっこを洩らしたときのために敷いてあるのだが、屋根つきの寝床のほうではおしっこはしなくなる。こうして、子犬は汚してもかまわない場所と、そうでない場所と、しつかり区別がつけられるようになる。

子犬のしもの糞として、一般的にそのような方法がある。以前、知り合いの専門家から教わった方法で、効果があるのは実際に試してみてわかっている。ところが今年になって、新たに室内犬として飼いはじめた子犬の場合は、特殊だった。

そもそも糞の必要がなかったのだ。彼女は最初から、おしっこをするべき場所とそうじゃない場所との区別を心得ているようだった。居間のカーペットや、キッチンマットの上で粗相して飼い主をじたばたさせるようなことはなかった。我が家に来てきた初日から、ただの一度もなかった。そこではしてはいけない、と誰も教えてもないのに。まだダンボールの空箱も用意していないのに。これは驚くべきことだ。摩訶不思議としか言いようのないことなんだ。

「そいでさ、もしや、と思つてね、死んだばあちゃんの名前を呼んでみたんだよ」

「ばあちゃん？ もうこの世にいない、ばあちゃんの名前？」

「うん試しに。そういう気持、わからないと思うけど」

「いや、わかる」

「わかる？」

「わかるよ」

というような会話を、ある日、古い友人と交わした。

ここまで、子犬のおしっここの件については、ぜんぶその友人から聞いた話を書いている。わかるよ、と発言したのが僕である。

僕自身は、生まれてこのかた犬を飼った経験はない。

猫はあるけど犬はない。犬はたいがい僕を見るといきりたつて吠えるので——一九六〇年代の子供の頃から、当時のスピッツ犬を代表とする無闇に吠える犬のイメージにとらわれているので——苦手で、今後飼いたいとも思わない。でも友人の気持はよくわかる。

一昨年の初夏に書き出した小説が昨年十二月に書きあがった。

年末にはゲラの初校が送られてきて、年明け一月いっぱいそのゲラと取り組み、加筆すべきところは加筆して、いくらか肩の荷がおりた思いで返送すると、二月に再校が出て、さらに念入りの、小説の細部への疑問が、編集者からと校正者からと色分けの付箋付きで投げかけられ、気合いを入れ直してまた加筆し、疑問の付箋を一枚一枚、はがしていく作業に集中した。そしてようやく一編の長編小説が完成した。書きあげた小説は僕の手をはなれ、あとは来月の出版を待つばかりになった。

それがいま——二〇一七年三月である。

で、古い友人から「子犬と死んだばあちゃんの話」を聞かされたのは昨年、二〇一六年後半の出来事だった。つまりこの「小説家の四季」連載の前回分——「お休み」として抜け落ちている、本来なら「二〇一七年冬」の回として書かれるはずだったエピソード——その穴埋めからいま入ろうとしている。

友人は東京から来た。

九州のどこかの街に仕事の用事があったついでに、僕の住む佐世保に立ち寄った。会うのは十五年ぶりくらいである。

どんなに遠い場所から誰が訪ねて来ようと、会うのが何年ぶりだろうと、それなりの服装に着替えて外出して、約束の場所に向くのは億劫だな、別に会わなくてもスマホで用は足りるしな、みたいな非社交的な、というかずばらな考えが、いつも（私用で）人と会うときは頭に浮かぶ。そのずばらを押さえ込んで、どうにかこうにか重い腰をあげたのは、僕も六十過ぎてだいぶ身体にガタがきてるし、この機会を逃せばもうあとはないかもしれない、これが友人の顔を見る最後のチャンスかもしれない、最後のチャンスを逃してもいいのか？と自分で自分を脅したうえでのことである。

大げさなのはわかっている。身体にガタがきてるといっても、なにも致命的な病におかされているわけじゃない。まだそこまでは行っていない。でも多少大げさな脅しでもかけないと、ガタがきた身体は言うことを聞かない。気力も、小説書きで使い果たしているので私用では、わからない。これが最後のチャンスだ——頭の中でそういう仮の設定を作り、気力を奮い立たせて、遠くから来た友人と会う。そうすると、待ち合わせた店のテーブルで向かい合って、近況を伝え合ううち、ふと相手の顔にじっと見入ったりする。なにしろこの顔も見納めだから、と感傷的になり、しみじみ見入る。

うん？ なに、どうかした？と友人が訊く。いや、どうもしない、と僕は仮の設定を打ち消し、現実に頭を切り替える。あれ、いま何の話をしてたんだっけ？

「ネット通販の、驚くべきスピードの速さ」と友人が言う。「注文から配達まで、へたしたら半日もかからない」

「そうなんだよ、実はこないださ、夜中にネット書店で注文したら、翌日配達ってお知らせが出てびっくりしたんだ」

「いや、だからその話はさつき終わったでしょ。岩波のホームページのエッセイにそんなこと書いてたよね？ それ僕読んだんだよ」

「……で？」

「で、うちの場合、夜中二時三時に注文するとね、朝の八時に配達に来る。どこか近くに物流倉庫みたいなものがあるのかもしれないけど、それにしても速い」

「朝の八時に本配達されてもね。読む気にならないよね」

「いや本じゃなくて、届くのは犬のペットシートなんだけど」

「犬のペットシートって？」

「風呂場とかに敷いて、そこで犬におしっこしてもらおう」

「ああそうか、昔から犬何匹も飼ってたもんね」

「何匹もいっぺんには飼ってないよ。昔から一匹ずつ飼ってた犬が寿命や事故で死んでしまっ、こんどが四匹目。まあそれはいいけど、今年飼いはじめた子犬が、ジャーマンシェパードって犬種なんだけど、かなり特殊な子でね」

そこで僕が、特殊な子？ どんなふうにと聞き返したところから、犬の話題になった。友人はまず一般的な子犬の躾の方法について解説したのち、特殊な子犬の話に移った——冒頭に書いたように。トイレの場所を教えないのに、自分から風呂場にトコトコ走って行って、お行儀よくペットシートで用を足す子犬。その光景は摩訶不思議としか言いようがなかった。不思議な光景を何度か驚きの目で見守るうち、その子犬が、友人には、去年不幸な事故で死なせてしまった飼犬の姿とダブって見えた。あるいはもう一代前、二代前の、寿命で死んでしまった飼犬たちの姿と。それで友人は試しに、その子犬に向かって、いまはもうこの世にいない飼犬たちの名前を、一つひとつ呼びかけてみた。もし子犬が、どれかの呼びかけに反応して振り向いたり、尻尾を振ったりしたら、それはその昔の飼犬の、生まれ変わりだということになるかもしれない。生まれ変わりだしたら、躾がもともと行き届いていることの説明がつくかもしれない。いや、それ以外に説明のつけようがないんじゃないか？ 友人は本気だった。

しかし子犬は友人の呼びかけを無視した。三つとも無視した。この子犬は昔の飼犬たちの生まれ変わりではない、という事実がそれで判明した。が、いったん「生まれ変わり」という発想が頭に浮かんだ以上、引つ込みがつかなくなったので、続けて友人は、過去の様々な記憶から、特別に大切な、父方の祖母の名前を取り出して呼んでみた。祖母には幼少時ずいぶん可愛がられた思い出がある。おもしろい後始末だとしてもらった記憶がある。友人はおばあちゃん子なのだ。そして子犬は雌犬なのだ。

「トシエ(仮名)！」と友人は子犬に呼びかけた。「トシエはおばあちゃん？」

何回も何回も、しつこく呼んでみたが、子犬は無反応だった。

友人のあてはずれた。

そうだよな、そんなはずないよな、と友人は落胆した。その落胆した思いを正直に、あとで妻に話してみると、仕事から帰ったばかりの妻は口をひらくのも面倒臭そうで、一切コメントせず、じろつと一回横目で夫を見ただけで、あとは首を振り振り、着替えるために奥の部屋に入った。そのあとを子犬が小走りで追いかけた。残業で疲れている妻にいきなり「生まれ変わり」などという日常と懸け離れたテーマを持ち出したのがまちがいだった。

だが僕には友人の気持がよくわかる。

なぜわかるかというと、友人の気持は——彼が「トシエばあちゃん？」と子犬を呼んだときの、日常からほんの一步、踏み外しかけた心のあり方は——偶然にも、僕が今回書きあげた長編小説の、登場人物の心情と相通じるからである。

というか、「トシエばあちゃん？」という問いかけそのもの、それを物語の中心に据えて書いた小説なのである。

……そうも言えるし、こうも言える。

僕が書いたのはいわば、子犬をばあちゃんの名前で呼ばずにいられない人と、その様子をじろつと横目で見て通り過ぎる人と、あとトシエばあちゃん当人と、三者の人生が交わる物語だ。

まあなんにしろ、僕は一昨年六月から昨年十二月までおよそ十八ヶ月ほどかけて、いわば「トシエばあちゃん」をめぐる物語を書いたのだ、あくまで、いわば、だが。十八ヶ月もの長期間、三者三様の登場人物たちとじろつつきあい、小説の世界にどっぷり浸かっていたのだ。最終章にたどり着いたのはつい最近、書きたてのほやほやなのだ。

「ふうん、そうなんだ？」僕の説明を聞いて友人は言った。「面白そうだね、その小説」

「うん、面白いに決まってる。子犬をばあちゃんの名前で呼んだりする人には、特に。だって自分のことが書いてあるわけだから」

「でも、うちの奥さんはなあ、なんて言うかなあ」

「奥さんも小説に出てくるんだよ。ものたとえだけど、奥さんみたいな人も」

「じゃあ本が出たら読んでみるよ。妻にも勧めてみる」

というわけで、その後のいま——本稿を書きあげ岩波書店ホームページにアップされる予定の四月初旬のいま——すでに小説は美しい装幀の本になって書店に並んでいる。リアル書店さんにも、ネット書店さんの物流倉庫にも、あなたに読まれるのを待って積んであるはずだ。肝心の本のタイトルは、『月の満ち欠け』

子犬をばあちゃんの名前で呼んだことのある人、その種の非常識な言動に抵抗のある人、また、かなうことなら、トシエばあちゃんその人にも、どこかでこの本を手にとってももらえたらと願っています。